

言語学雑記

河野 庸二

はじめに

筆者の興味関心が言語学のなかでも語源学もしくは比較言語学の分野に集中していることには今も昔も変わりはない。但し今回は特に、語源学・比較言語学的内容を、これまでとは異なった角度からとりあげて、要するに言葉に関する雑多なメモとしていくつかの章にまとめてみた。タイトルを「言語学雑記」としたのはまさしくそのためである。

素人から教えられること（その1）—新幹線のアナウンス—

新幹線の英語によるアナウンスを教材としてとりあげることがある。明らかに日本人の女性アナウンサーによる聞き取りやすい発音であるから初心者向きであり、また日本語によるアナウンスの直後のいわば対訳的な車内放送であるから、ヒアリングの実地における練習用に、さらには英語による表現法のコツをつかむためにも恰好のチャンスと思われるにもかかわらず、列車内の英語アナウンスに注意を払う日本人乗客は皆無に等しいと考えられるからである。たとえば、「間もなく小郡に止まります。降り口は左側です。」は次のようになる。

We'll soon make a brief stop at Ogori. The exits are on the left side of the train. Thank you.

教える際に“*We*”という主語と“*make a brief stop*”という表現のしかたに焦点を当てることはいうまでもない。ところで、アナウンスの終わりに添える“*Thank you.*”については次のように説明することにしている。「日本人にとっては、車内アナウンスを当たり前のことと考える習慣ができてしまっているので、たとえば終点まで乗るつもり乗客でも、自分には直接関係のないアナウンスを聞かされて別に迷惑と感ぜないが、欧米では事情が違う。途中の停車駅の案内などは不必要な乗客にとっては、車内アナウンスは

むしろ迷惑なのだから、乗務員側が『ご協力ありがとうございます』とか『お妨げしました』ほどの意味で断りをいうのです。」ところがあるとき社会人のクラスでそれをいうと、受講者のひとりが「そうでしたか。私はまた『ご利用くださいませありがとうございます』のつもりで言っているのだと思っていました。」と言った。「そうなのか。一般の人たちはそのように解釈しているのか」と初めて思い知らされた。つまり日本人にとっての盲点、したがって英語の勘どころともいべき一つのポイントを、逆に素人から教えられたわけで、教える側がかえって大いに啓発されたというわけである。

素人から教えられること（その2）—サイネリアー

日本人がことさらに縁起をかつぐのはまさしく仏教のせいである。そもそも縁起という言葉自体典型的な仏教用語であることに気づく。欧米であれば、たとえば裁判所の隣に刑務所があったり、病院の隣に共同墓地があってもなんら不思議ではない。だからこそアイザック・アジモフは *Izaak Asimov's Book of Facts* のなかの東洋関係をまとめた *The Orient* の章に、奇異な「事実」の実例として次のような短文を載せたのである。

Because the Japanese word for “four” sounds exactly like the word for “death” and because the word for “nine” sounds like the word for “suffering,” there are no rooms numbered 4 or 9 in many hospitals and hotels in Japan.⁽¹⁾

（日本語の「四」の発音が「死」に通じるため、また「九」が「苦」に通じるために、日本の病院やホテルには多くの場合4号室、9号室がない。）

もちろん迷信の存在は洋の東西を問わないのだが、この迷信が宇宙時代、コンピュータ時代の日本に根強く残っているということも確かな事実である。しかしアジモフがことさらにこの迷信をとりあげているのはそれが欧米人にとってよほど奇異なことのように感じられるからに違いない。要するに病院は人の生死にかかわる場所であるだけに、それにまつわる迷信は根強いのだと言える。事実入院患者の見舞いには鉢植えは禁物だと聞く。「根付く」が「寝つく」に通じるからだ。またアジモフが指摘したのと同じ理由で「シネ

ラリア」は嫌われるのだという。言うのでもなく「死ね」に通じるからである。ところが日本の花屋も負けてはいなかった。昨今では「サイネリア」と名前を変えて売られているというのである。牧野の植物図鑑にも「サイネリア」はこの植物のれっきとした名称の一つとして索引にもあがっている。

ところで、あるとき知人宅の玄関先で「シネラリア」を見つけてこの話をその家の主人公にしたところ、彼氏のいわく「ハハア、逆にめでたい名前にしたというわけか。」この一言で筆者にははたと思い当たることがあった。つまり彼が言わんとしたのは「サイ」は「幸い」の「さい」だというのである。うかつにも筆者自身はそのことに気づかずにいたのである。かくして筆者はまたもや素人から逆に教えられたのであった。ちなみに筆者の在住する山口県東部の山間部には「さいがたけ」という茸の一種があり、食用ではないが陰干しにして得られたひよろ長い茎（椎茸の場合と同様に「石づき」と呼ぶべきか）の部分を仏壇等にまつておく習慣がある。そして「さいがたけ」という呼称は言うまでもなく「幸が茸」の意に相違ないのである。

この種のいわゆる「縁起かつぎ」はわが国では随所に見られることで、たとえば北海道のアイヌ語地名「支笏」が「死骨」に通じるというわけで、逆に縁起のよい「千歳」に変えられたという経緯と軌を一にするものと言えよう。

正確な情報を得るためには—ヨアヒム・ネアンデル—

先年山口大学の広報誌の一つである YU Information の第25号の連載記事「私の研究」に「語源学がおもしろい」という文章を寄稿したことがある。いくつかの章を起こして興味深い語源もしくは語源説の実例を紹介したなかには「ネアンデルタール」の章も含まれていた。次に引用するのはその章の全文である。

ネアンデルタール

人口に膾炙するこの化石人類の名がその発見の地名に由来することぐらいいは誰にでも想像がつくはずだ。しかしそれ以上の真相は案外知られていないのではあるまいか。要するに最初の化石が、ライン川の支流をなすデュッセル川上流のネアンデルの谷（=Thal, Tal）で発見されたのである。問題はネアンデルとは何者かである。17世紀この地方にヨアヒム・ノイマン（Neumann）という地方詩人がいて、少し気取って自分の名を

ギリシャ語風に Neander と称していたという。つまり (neos=new, andros=man) なのである。この耳寄りな情報を私は日本の科学雑誌『Newton』の1992年10月号の記事のなかで見つけた。

その後岩波新書の鈴木尚著『化石サルから日本人まで』を手に入れてページを開くと開巻第一ページに「一九世紀における化石人類の研究」の章があり、その第1項がたまたま「ネアンデルタール人をめぐる論争」であった。そしてそこには筆者がかつて科学雑誌『Newton』から得た情報の不備を補完する記述がなされていたのである。

ネアンデルタール (Neanderthal) とは、ドイツ語で「ネアンデルの谷」の意味であるが、実はヨアヒム・ネアンデル (1650-1680) にちなんで名づけられたのである。彼は一六七四年から七九年までデュッセルドルフ市のドイツ新教学校の校長の職にあったが、同時に、賛美歌の作詩・作曲家として有名であった。実際、賛美歌の中に彼の作品を見出すことができる。彼はこのあたりの風景の幽玄な美しさを、こよなく愛して、しばしばこの地を訪れ、詩想を練ったという。このようなことから、誰いうとなくこの谷をネアンデル氏の谷、ネアンデルタールと呼ぶようになり、さらにここにできた村にも同じ名がつけられたという。⁽²⁾ (下線筆者)

これほど詳細にわたる記述がなされているにもかかわらず、奇妙なことにこの本には肝心の「ネアンデル」という名前の由来が一言も記されていない。辞典等の場合も同じで、すぐれた説明文といえども、えてしてこのようなぬかりがどこかにあるものなのである。語源に限らず何事でも正確な情報を得るためには複数の情報源に頼ることが絶対に必要という教訓になった。

外国人の日本理解—ウサギの数え方—

外国人が日本を理解し得る程度のいかんは、結局その人が日本に長く在住するか否か、あるいはただ書物等の情報源によってのみ知っているのかによって大きく左右されるであろう。『聖書物語』をはじめすぐれた啓蒙書を数多く著したオランダ系アメリカの著述家であったヘンドリック・バンルーンの比較的知られていない著書に、『世界の国々』とでも題すべき内容の大著 *The Home of Mankind* (1933) がある。その第39章は特に当時の日本帝国

を単独にとりあげたもので、そのものずばり The Japanese Empire と題されているが、そのなかには驚いたことに次のような一節がある。

North of Osaka lies Kyoto (Tokyo is merely Kyoto turned round),
the ancient capital of the Empire.⁽³⁾ (下線筆者)

(大阪の北には帝国の古都、京都がある。(Tokyo は Kyoto をひっくり返しただけの地名である。))

ローマ字で表記すればたしかにそうだが、日本人なら誰しもこの間違いがわかるはずだ。「東都」とも称されるとおり東京は「東の都」であり、京都のほうはいわば「みやこ」の反復にすぎない。ちなみに九州福岡県には「京都」郡があり、この場合は「みやこ」郡と読む。要するにバンルーンは著書のなかで日本に関する生半可な知識を心ならずも暴露してしまったということになる。

一方演劇評論家作家だった故戸板康二の随筆集『忘れじの美女』に収められた「ウサギ十二題」の内の一編「守株」の故事には次のような一節がある。

ところで、そのウサギが走ってきたとき、木の株にぶつかって転倒、そこにいた農夫が勞せずして、一羽(なぜか、一羽と数える)のウサギを手に入れたという宋代の故事が、中国の古典、韓非子に書かれている。⁽⁴⁾

(下線筆者)

博学多識であるはずの戸板康二がウサギの伝統的な数え方(= 陪伴詞)の理由を知らないというのは意外だが、たまたま日本在住の作家 C. W. ニコルが先年ある機内誌に“Hunting Culture in Japan”と題する一文を寄せており、それが図らずも戸板氏の疑問に答えるかのような内容になっている。

Many Japanese rather pompously tell foreigners that the difference between themselves and Western cultures lies in the fact that Westerners sprang from a hunting culture and Japanese from a farming one. The truth is far more complicated. Apart from the rich hunting, fishing and gathering traditions of the Ainu people,

largely ignored, there is a very ancient culture of the same sort in Japan from north to south, better preserved and documented in many cases than that of Western countries.

Buddhist teaching curtailed a lot of the eating of four-legged animals in this country, although feeding on whales and dolphins as well as birds continued. In the countryside certainly, the traditions of eating wild meat carried on, but a few semantic tricks were used by way of justification. Hares, for example, were counted as birds and wild boar meat was called "mountain whale."⁽⁶⁾ (下線筆者)

(多くの場合日本人は日本文化と西洋文化の違いは西洋人が狩猟文化に端を発するのに対して日本人が農耕文化から出ていることだといささか大げさに断言するが、本当はそう簡単に言いきれるものではない。問題外とされているアイヌ民族の豊富な狩猟、漁労、採集文化の伝統は別にして、日本全国、津々浦々にこれと同種の非常に古くからの文化があり、それらは多くの場合西洋におけるよりもよく保存され、記録されてもいるのである。

仏教の影響で日本では四つ足の獣をおおっぴらに食べることはしなくなった。もっとも鳥類のみならずクジラ、イルカ類の捕食はつづいていたのである。たしかに地方では野生動物の肉を食べる習慣は続いて行われていたが、もっともらしい口実を設けてそれを正当化していた。

たとえばウサギは鳥として数えられ、イノシシの肉は「山クジラ」と呼ばれたのである。)

単なる日本在住というのではなく、豊かな自然に恵まれた長野県北の黒姫山山麓に居をかまえ、日本の伝統的文化に深くかかわりながら作家活動をしている C. W. ニコルならではの正しい日本文化理解といえよう。ウサギが鳥として数えられてきた理由をさらに蛇足として付け足すとすれば、わが国では既述のような理由からウサギの長い耳を鳥の翼に見立ててきたのだ。その伝統が今日まで続いているというわけである。

揺れつづける外来語—「白菜」のアメリカ名の場合—

イギリスでは「白菜」を Chinese leaves という。どうやら中国から渡来

したらしい。以上までは1989年から1990年にかけて文部省の在外研究員としてロンドン大学ユニバーシティ・カレッジに留学した際、ロンドンのスーパーマーケットで得た知識である。ところでその前年1988年夏米国南カリフォルニアのサンディエゴ近郊のビスタにホームステイをしたとき、行きつけのフードストアの野菜コーナーで目にとまったのは、キャベツの隣に陣取った白菜のネームタグに記された‘NAPPA CABBAGE’という名称であった。何よりもまずこの呼称から、この野菜のアメリカへの伝来の経路が一目瞭然であると思えたし、同時にまた、はるかな異郷の地で思いがけなく葉野菜の総称である「菜っ葉」という日本語に出会ったことを愉快に思った。ところが1993年夏海外研修の学生引率で、テネシー州マーティン市に滞在したおり、当地のスーパーで見かけた白菜のネームタグは‘NAPA CABBAGE’になっていて、‘P’が一つ落ちている。「菜っ葉」という日本語に馴染みのないアメリカの人たちは、おそらく北カリフォルニアのブドウと野菜の産地ナパと混同したのであろう。つまり「ナパ産のキャベツ」と早合点したのである。

その後サンフランシスコのあるスーパーでは‘NAPPA CABBAGE’‘PAK CHOI’という2とおりのネームタグを見かけている。後者は「白菜」の韓国語による発音を表記したものであろう。そして驚いたことに、1998年夏マーティン市のスーパー「エクセル」の白菜はキャベツから離れた場所に移されていて、ネームタグにはただ‘NAPPA’とだけ記されていた。思うにキャベツと白菜の共通点はどちらも十字花植物であることと、結球することぐらいであろう。要するに白菜は、‘NAPPA CABBAGE’という命名以来幾多の曲折を経て‘NAPPA’にまでたどりついたということであろうが、これとても決して定着したものではあるまい。正確にはアメリカの一部で行われている呼称にすぎないであろう。

注)

- 1) Izaac Asimov: *Izaac Asimov's Book of Facts*:Hastings House:1992
- 2) 鈴木 尚: 化石サルから日本人まで: 岩波書店: 1971
- 3) Hendric Van Loon: *The Home of Mankind*:George G. Harrap & Co.:1933
- 4) 戸板康二: 忘れじの美女: 三月書房: 1988
- 5) C. W. Nicol: "Hunting Culture in Japan": 全日空機内誌ウインズ 5月号: 1995

Miscellanies in Linguistics

Yoji Kawano

Here is a miscellaneous essay on linguistics which consists of five chapters more or less concerning etymology. The first chapter "Lessons Taught by Amateurs 1" deals with *English Announcements in Shinkansen*. Most Japanese people seem to misunderstand the 'Thank you' added at the end of an announcement to be the gratitude expressed by the crew for riding the train.

Chapter 2 entitled "Lessons Taught by Amateurs 2" is about *Another Name of Cineraria*. Deeply influenced by Buddhism, Japanese people are very superstitious even today. Because 'cine' [sine] sounds like the word for 'Die!' in our language, clever Japanese florists coined the word 'cineria' because 'ci' [sai] sounds like a word meaning 'happiness.' It is now current throughout the country as another name of the plant.

In the third chapter, "How to Get Correct Informations" the author revises *the derivation of a German place name 'Neanderthal'* (Neander Valley), world-famous as the site of the early human fossil discovery.

In Chapter 4, "A Foreigner Better Acquainted with Things Japanese," the author cites C. W. Nicol's short essay "Hunting Culture in Japan" for the purpose of exemplifying how a foreigner can be better acquainted with things Japanese than the Japanese ourselves. In the essay the British writer living in Nagano Prefecture explains *how in Japan a rabbit has come to be counted as a bird*.

The last chapter falls under the category of comparative linguistics. It is a fruit of the author's field work in which *American names of a leafy vegetable introduced from Japan* are reported. American people once named 'hakusai' (Japanese) 'nappa cabbage' but it is sometimes called 'nappa cabbage,' or just 'nappa.' To tell the truth, 'nappa' is a Japanese word meaning 'leafy vegetable in general.'